実践事例.04

たくさんの大人とのふれあいと「人の役に立つ」ことの意識が一人ひとり「自分未来史」を深める

広域通信制 私立 第一学院高校

東京事務局次長
教務担当
市川 淳先生

School Data

2005年設立／広域通信・単位制高校、総合学科／卒業生数2,267人（2012年度実績）／進路状況（2013年実績）大学24.7%・短大3.9%・専門学校38.9%・就職11.2%その他21.3%

勉強の動機づけにつながる「人の役に立つ」を意識する

広域通信・単位制高校の第一学院は、茨城県・高萩本校と兵庫県・養父本校を中心に、全国68カ所にキャンパスを構えている。生徒は、それぞれの都合に合わせながら、キャンパスに通うか、通信教育による自宅学習によって高校卒業を目指す。そんな同校には、人とかかわることに不安を抱いていたり、自分に自信を失って入学してくる生徒も少なくない。そのため、マイナスな自己イメージをリセットし、プラスの自己イメージを定着させ、前向きに行動できることを目指す独自の教育メソッド「EMS（The Educational Method of Self-motivation）」で生徒の成長を促す。

「さまざまなワークや特別講座などを通じ、意欲喚起を行います。さらに、日常的に教員が受容と共感、称賛の働きかけをすることによって、生徒のプラスの行動を引き出すのです」とは、同校のキャリア教育のカリキュラム開発を行う市川淳先生。このEMSの考え方は、授業や日常生活の指導だけでなく、キャリア教育でも同様。自分自身を受け入れ、周囲とのコミュニケーションに踏み出し、それによってまた周囲から認められ、前進していく。そのための仕組みをあらゆる場面で設けようというのが、同校の考え方だ。

「そもそも勉強の動機づけは、『人の役に立つこと』なんだと思うんです。例えば、社会人を招いて仕事の話をしてもらうと、人の役に立っているからこそのやりがいや楽しさを必ず語ってくれます。誰も『お金のため』なんて言いません。じゃあ、自分はどんなふうに人の役に立つのか、立てるのか。そういうことに気づくきっかけをたくさんつくることが、勉強の動機づけにもつながると思っています」

3年間で深め、高度化する「自分未来史」づくり

同校がキャリア教育の大きな柱として位置づけるのが、1年から3年まで継続して行う将来設計指導。総合的な学習の時間を利用して、自分のこと、職業のこと、キャリアのことなど自分自身と将来を考えるためのテーマに沿った授業と、そのつど作成するワークシートによって、徐々に未来を現実のこととして考えていく。そして、それらのワークシートを「自分未来史」と書かれた1冊のファイルに3年間を通して綴じていく。

「1～3年まで、毎年同じテーマを繰り返し、内容は学年に応じて深め、高度化していきます。そのため、3年間つづったワークシートを見返すと、自分自身の未来への考えの変遷や、成長のあとを実感できるんです」

さらに学年末には、「自分未来史」ファイルをもとに担任と面談を行う。どんなことを考えたか、何に気づいたか、それをもとにどのような仕事や将来への希望を抱いたかなど、より具体的に自分と未来のことを考えるよう促す。

「明確な目標が今すぐみつからなくても、『思考する癖』をつけることが大事だと思うんです。もし将来何かあっても、そこで自分で考えて行動できる。そういう力をつけることがキャリア教育の意味だと思います」

この授業は、すでにスタートから9年を経ている。その間、同校は普通科から総合学科に変わり、現在は、1年次に『産業社会と人間』の授業もある。内容的には重複する部分もあるが、「より多くのきっかけによって考えを深められるだろうと、両方行うようにしています」と市川先生。生徒がどのタイミングで、何をきっかけに変化するかは正直わからない。だからこそ、多くの機会を設けるのがキャリア教育では重要なのだ。

地域全体を「学校」ととらえた「コミュニティ共育」

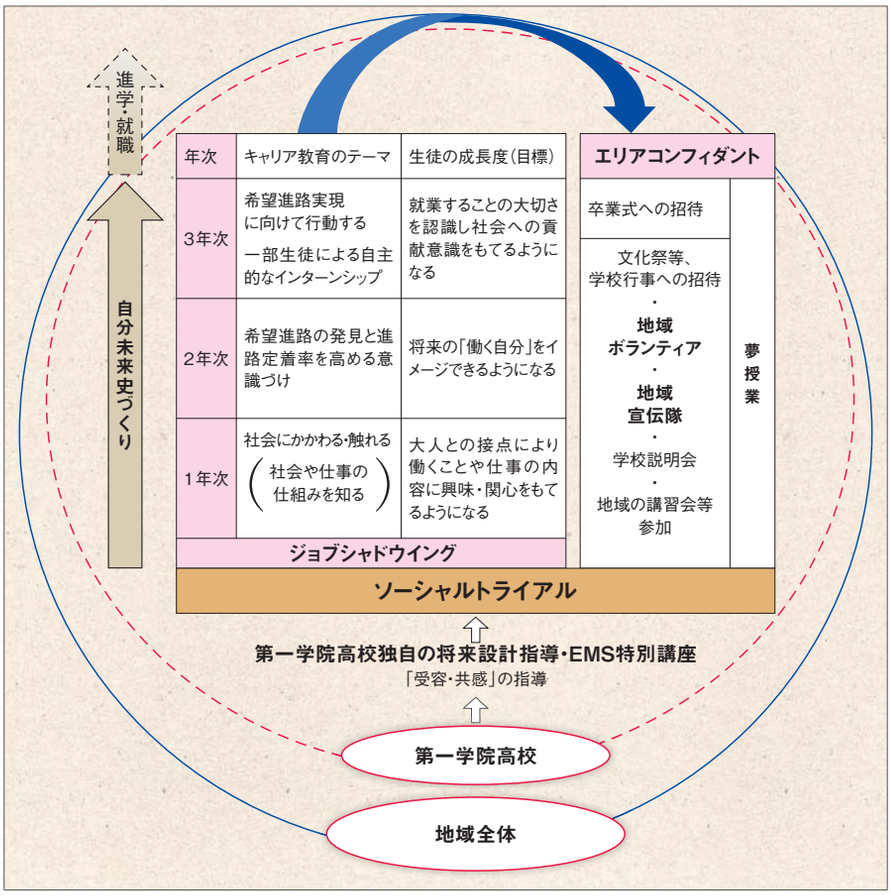
多くの機会を設けるという観点から、昨年度からは地域を巻き込んだ「コミュニティ共育」を開始した。

「コミュニティ共育では、キャンパス周辺の地域の方々にご協力いただき、たくさんの大人とのふれあいを通じて「働くこと」「将来の自分」をイメージしていきます。そして、自分たちが多くの人に支えられているということを知り、さらに、地域に貢献することも体験してもらいたいと思っています」

具体的には、ボランティア活動や、職業

取材・文／清水由佳

第一学院高校のキャリア教育イメージ



ジョブシャドウイングで、働いている人の姿を観察し、仕事の大変さ・やりがいなどを学ぶ。

地域宣伝隊の活動風景。たくさんの大人と触れ合うことでコミュニケーション能力も育まれる。

専門学校の体験授業に参加。興味のある分野をより深く学び、意欲的に、自分の未来を選択していく。

人に話を聞く「夢授業」、ジョブシャドウイングなどがあるが、ユニークなのは、地域への貢献を考えた「地域宣伝隊」という活動。1年次には駅からキャンパスまでの地図を、地域の人々にインタビューもしながら作成。2・3年次には、その地域を紹介するリーフレットを作成し、Webや文化祭などで広く一般に公開する。そして、文化祭などの学校行事でも、地域の方々を招き、交流を深めようとしている。まさに地域全体を「学校」ととらえた取り組みの数々である。

さらに、このような活動を行うにあたって、人とのコミュニケーションのあり方を学ぶ「ソーシャルスキル講座」も、今年度から実施。人の話を聞き、自分の話をする。そんなコミュニケーションの基本となる、心構えやマナー、テクニックなどを学ぶのだ。

「先日、関東圏のキャンパスの生徒を専門学校の体験授業に連れていったのですが、服装やあいさつが例年よりしっかりとしている印象でした。こういう時はどう振る舞うべきか、人に受け入れられやすいコミュニケーションとは何かが理解され始めたのではないでしょうか」

「コミュニティ共育」や「ソーシャルスキル講座」は、まだスタートしたばかりだが、「今年は英検や漢字検定、ニュース時事、ボキャブラリー検定など、各種資格取得にチャレンジする生徒が増えた」と市川先生。「前向きになって、今の自分を向上させる行動につながっているのかもしれません。効果が出ているのだとしたらうれしいですね」と語った。

さまざまな取り組みが、自ら変わることの楽しさにつながり、生徒自身が「キャリアデザイン」する力につながっていく。そんな循環を、同校のキャリア教育は実現し始めているのではないだろうか。

実践のヒント

ゆるやかに地域とつながる「エリアコンフィダント」を実施

Q 地域をキャリア教育に巻き込むコツはありますか？

当校では、各地域で当校の教育活動に協力してくださる方々に、「エリアコンフィダント」になっていただいています。

これは、何かあったときに時間の都合がつくようだったら気軽に手を貸してほしいというもので、ゆるやかに地域とつながっている仕組みです。

例えば、ジョブシャドウイングに協力してくださった企業の方に文化祭のお誘いをしたり、お世話になった生徒の卒業式にご招待したり。卒業生に生徒の補習やサークルの指導をお願いしたり。

いろいろな機会に気軽にお声をかけ、手が空いていたら協力していただく。そんなゆるやかなつながりが、大事だと思います。

（市川先生）